

入試年度	2026年度	入試時期	I期入学試験	実施日	2025年9月26日
課程	博士前期課程	研究科	国際日本学研究科	専攻・コース	国際日本学専攻 多文化共生・異文化間教育領域
入試方式	一般入学試験/ 外国人留学生入学試験		試験科目	専門科目	

「出題の意図」および「解答」または「解答例」

### 【出題の意図】

**論述問題**は、異文化間教育および留学生支援に関する理論的理解と、それを実践的文脈において応用する力を評価することを目的とした。(1)と(2)のいずれの設問においても、受験者が自身の経験や問題意識を踏まえながら、多角的かつ批判的に論述することが求められる。

**解説問題**は、多文化共生・異文化間教育学に関する基礎概念についての理解の深さと、それらを適切に説明する力を評価することを目的とする。各設問では、単なる定義の再生ではなく、概念の背景にある理論的枠組みや意義を踏まえたうえで、具体例や文脈と関連づけながら説明することが求められる。

### 【解答例（採点時の観点）】

#### 論述問題

(1) 通常のカウンセリングと比較して、文化背景の異なるクライアントへのカウンセリング（異文化間カウンセリング）を行う際に留意すべき点とその対策について述べなさい。

#### 【解答例】

異文化間カウンセリングでは、通常のカウンセリングに比べ、文化的背景の違いがクライアント理解や援助関係の形成に大きく影響するため、いくつかの点に留意する必要がある。第一に、言語およびコミュニケーション様式の差異である。母語以外での相談では感情表現が制限される場合があり、沈黙や視線、自己開示の程度といった非言語的行動の意味も文化によって異なる。そのため、発話量の少なさを消極性と即断せず、比喩や暗黙の意味を丁寧に確認する姿勢が重要である。必要に応じて通訳の活用や、理解の確認を重ねる工夫が求められる。第二に、心理的問題に対する文化的認識の違いである。心の不調を身体症状として表現する文化や、専門家への援助希求が一般的でない文化も存在する。したがって、西洋的な心理モデルを前提とするのではなく、クライアントの文化における健康観や価値観を理解し、それに即した関わりを行う必要がある。第三に、カウンセラー自身の文化的バイアスへの自覚である。自文化中心主義に基づく解釈は、クライアントの経験を歪めて理解する危険を伴う。そのため、自身の価値観や前提を内省し、文化的謙虚さをもって関わることが不可欠である。すなわち、クライアントをその生活環境や文化の専門家として尊重し、理解を固定化せず対話的に確認していく姿勢が求められる。第四に、社会的・制度的文脈への配慮である。異文化背景のクライアントは、在留資格、差別、言語的孤立などの構造的課題を抱えている場合がある。したがって、心理的支援にとどまらず、学内外の支援機関との連携や社会資源への橋渡しを含めた包括的支援が重要となる。以上を踏まえ、異文化間カウンセリングでは、文化を固定的に捉えるのではなく、個人差を前提に「その人自身」を理解しようとする姿勢が求められる。そのためには、オープンな質問による丁寧な聴き取り、理解の不確かさを率直に確認する態度、さらに継続的な学習やスーパービジョンを通じた専門性の向上が不可欠である。

(2) 留学生教育における主な理論・モデルを2つ挙げ、それぞれが実際の留学生支援にどのように応用できるのかを説明しなさい。

### 【解答例】

留学生教育においては、学習支援のみならず、異文化適応や社会参加を含めた包括的な支援が求められている。その枠組みとして重要なのが、フォーマルとノンフォーマル教育の区別、及び異文化適応モデルと留学生アドバイザーである。

まず、留学生教育はフォーマルとノンフォーマル教育に大別される。フォーマル教育とは、大学の授業、語学教育、カリキュラムに基づく教育活動など制度的に整備された教育を指す。一方、ノンフォーマル教育とは、現地学生との交流、ホームステイ、地域住民との接触、課外活動など、異文化理解や対人関係形成を目的とする非制度的な学習機会である。この区別は、留学生教育が今日陸内の学習にとどまらず、生活世界全体に広がる実践であることを示している。

この枠組みを理論的に支えるものとして、第一に社会文化的適応モデルが挙げられる。このモデルでは、異文化適応を心理的適応と社会文化的適応に区別し、特に後者は現地社会の文化や規範に適応し、対人関係を築きながら生活する能力を意味するとされる。この理論の重要性は、留学生の困難を語学能力の不足に還元するのではなく、対人関係、文化理解、社会的スキルといった広い要因から捉える点にある。

このモデルは、フォーマルとノンフォーマル教育の双方に具体的な示唆を与える。フォーマル教育の側面では、日本語教育において文法中心ではなくコミュニケーション能力を重視する指導や、異文化理解を含む教育内容の設計が求められる。一方、ノンフォーマル教育の側面では、現地学生との交流活動や地域との接触機会を設計することで、実際の対人関係を通じた適応を促進することができる。すなわち、社会文化的適応は教室内だけでは達成されず、ノンフォーマルな場における経験が不可欠となる。

第二に、留学生アドバイザーが挙げられる。留学生アドバイザーは、NAFSAによる実践の蓄積や国内外の研究者によって体系化された。さらに、アドバイザーの内容として異文化カウンセリング、修学・生活支援、オリエンテーション、交流コーディネーション、教育活動、研究・研修、国際交流運営などの複合的領域からなるものとして整理されてきた。

アドバイザーは、フォーマルとノンフォーマル教育を統合する枠組みとして有効である。すなわち、授業や日本語教育といったフォーマル教育だけでなく、交流活動や生活支援といったノンフォーマルな領域を含めて一体的に支援する体制を構築することが求められる。例えば、初年時オリエンテーションでは学習方法だけでなく生活情報や対人関係の築き方を扱い、継続的なアドバイザーによって問題の予防と対応を行うことが可能となる。また、専門スタッフの配置や学内の連携体制の整備により、留学生支援を個別対応から制度的支援へと転換することができる。

以上のように、フォーマルとノンフォーマル教育の区分は留学生教育の全体像を理解する基盤であり、社会文化的適応モデルはその内容的側面を説明し、留学生アドバイザーはその実践的・制度的側面を支える枠組みである。これらを統合的に捉えることで、教室内外を横断した総合的な留学生支援が可能となり、より実効性の高い教育実践へとつながるといえる。

### 解説問題

(1) アクションリサーチ

【解答案】 アクションリサーチとは、現場の当事者と研究者が対等な立場で協働しながら実践を行い、その過程を通して知を生成し、社会の変化や問題解決を目指す研究方法である。従来の研究が対象を客観的に観

察することを重視してきたのに対し、アクションリサーチでは研究者自身が現場に関与し、実践を通じて変化を生み出しながら理解を深める点に特徴がある。重要なのは、研究者と当事者が「共同当事者」として学び合い、共に変容していく関係性である。このアプローチは、教育やコミュニティ開発、国際協力、医療など多様な分野で展開されてきた。理論的背景としては、クルト・レヴィンによる社会変革志向の研究、パウロ・フレイレのエンパワーメントを重視した教育実践、さらにジョン・デューイの経験に基づく教育思想などが挙げられる。これらはいずれも、現場に根ざした実践と知の往還を重視する点で共通している。

## (2) 社会的排除

**【解答案】**社会的排除とは、個人や集団が社会の主流から切り離され、経済的・社会的・文化的・政治的な資源や機会へのアクセスから締め出されていく過程と、その結果としての状態を指す。単なる貧困にとどまらず、教育、雇用、医療、住宅、政治参加など複数の領域で不利が累積し、社会とのつながりや所属感が弱まる点に特徴がある。制度的差別や偏見、言語能力や在留資格といった法的地位の制約、雇用機会へのアクセスの制約などが絡み合い、排除を固定化・再生産する構造的メカニズムを形成している。これは個人の能力不足や努力の欠如に還元できる問題ではなく、社会構造や制度設計に根ざした多次的・動的なプロセスであり、その解消には包摂的な制度設計と多様な背景をもつ人びとを前提とした参加機会の再構築が不可欠である。

## (3) 文化の氷山モデル

**【解答案】**文化の氷山モデルとは、文化を「目に見える部分」と「見えない部分」に分けて捉える理論であり、異文化理解の基本的枠組みとして広く用いられている。このモデルは主に、1960年代にアメリカの人類学者エドワード T.ホールによって提唱された文化理解の考え方を基盤としており、その後、異文化コミュニケーション教育や留学生教育の分野で発展的に用いられてきた。

このモデルでは、文化は氷山に例えられる。すなわち、水面上に見えている部分は文化の一部に過ぎず、その大部分は水面下に隠れているとされる。水面上にある明示的文化（表層文化）には、言語、食文化、服装、建築、儀礼、行動様式などが含まれる。一方、水面下にある暗示的文化（深層文化）には、価値観、信念、思考様式、感情表現の規範、時間感覚、対人距離、権威感などが含まれる。

ホールは、文化の本質はこの不可視的領域にあると指摘しており、異文化間の誤解や摩擦の多くは、この見えない文化の違いに起因するとされる。例えば、同じ言語を用いても、発言の意図や解釈が異なるのは、背後にある価値観やコミュニケーション様式の違いによるものである。この点で、氷山モデルは文化を表層的な行動の違いとしてではなく、その背後にある深層構造として理解する重要性を示している。

## (4) 異文化間能力

**【解答案】**異文化間能力（intercultural competence）とは、自らとは異なる文化的背景や価値観をもつ人々と関係を築き、相互理解や協働を可能にするための総合的な能力である。これは、文化間の意見・価値・態度の違いや衝突を乗り越え、調整・統合していく力を含む心理学的構成概念である。その構成要素は、一般に他者への尊重や開放性、判断を急がないなどの態度を基盤とし、自文化および他文化に関する知識、さらに傾聴・観察・解釈・関連づけといった技能から成る。こうした態度の中核には、異文化接触に伴う不確かさや葛藤を安易に解消せず受けとめる力（異文化間トレランス）も含まれる。これらは相互に関係しながら、異文化状況において適切かつ効果的に対話し、協働する行動として現れる。また、異文化との接触やその振り返りを通じて、自分の前提や価値観を相対化し、柔軟に捉え直していくことも重要である。この過程は、自民族中心主

義的な世界観から、自文化を多くの文化の一つとして相対的に捉える世界観への移行としても描かれうる。このように異文化間能力は、一度身につければ終わりというものではなく、経験と省察を重ねながら発達していく能力である。

#### 合否判定の方法及び基準

入学試験は国際日本学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。